

25時行動委員会・富山

通信 4

2015.8.16

25時行動委員会・富山

(090-7744-0122 藤岡)

E-mail:25h.action@gmail.com

Url:<http://25h-action.blogspot.jp/>

「私・たちの告知——列島を宰領する国家への」(最終版)への
の〈後註〉

第1の〈後註〉——2015年7月31日

1. この「告知」で私・たちはくり返しある詩のフレーズを〈引用〉しているが、このきわめてわきまえを欠く不遜なふるまいについてはただただ恥じ入るばかりだが、そのフレーズのあるべき場所に戻したものを、以下に掲げておきたい。

「薄命の海をながれる藍よりも
さらに淡い器物の青に
ひたすらに一日の憂悶を鎖す。

わが祖父たちの奪ったもの、
わが兄弟たちの掠めたもの、
ついに奪いえず、掠めえなかったもの。
自らを恃んで傲らぬもの、
謙抑にして自らを卑しめぬもの、
故宮の城壁を画る空よりも
さらにはるかなるもの
その淡い器物の青に
夏を銷し冬を銷し時を銷し
ひたすらに憂悶を銷し、かえって
憂悶ふつつつと湧きくるを知る。」

なお、中村稔「器物—高麗」は、「李朝」・「志野」・「信楽」と続く4連作の一部である。

2. 脱冷戦期に入ってからのアジアからの〈声〉にたいする日本国家の対応をしめすいわば象徴として「戦後50年村山談話」があるが、「村山談話」をめぐる政治過程については、浅野豊美「歴史問題と安全保障・連環の系譜——戦後50年村山談話と戦後70年安倍総理訪米」(シリーズ「日本の安全保障」第6巻 岩波2015) 参照。なお、「村山談話」を含む1995年が、今日にいたる「戦後日本国家」の変容における「分水嶺」であることについては、武藤一羊「安倍政権を葬るなかで新しい世界を捕らえる——戦後日本国家をめぐる原理次元での対決」(「8・6ヒロシマ平和へのつどい2015」講演レジュメ)、同「戦後日本国家と”革新勢力”の解体」(「アメリカ帝国と戦後日本国家の解体」(社会評論社2006) 参照
3. 戦後日本国家が植民地支配・侵略戦争責任をアメリカの「覇権主義」(「パックスアメリカーナ」)の庇護の下でやりすごしてきたことをめぐって私・たちが抱く「恥」の感覚について、私・たちが「恥をかく」ことにとって他者としてのアジアが不可欠であることについて、酒井直樹が鋭く指摘している。——「アジアとの共生の条件として、先ず考えなければならないのは、自らを非日本人あるいは日本人のなかの非国民の眼差しに曝す勇気です。そのためには、自己憐憫の共同体としての「日本国民」の外に出ることが必要になるのです。(中略)日本の外部とは、恥の体験を通じて私たちが出会う、他者の他者性に他ならず、それは空間的に表象出来る外部とは違ったものなのです。(後略)」「恥」は私たちがアジアの人々や、日本人の共同体とは無縁の世界の人々に開かれること、恥をかくことによって他者の眼差しに曝されること、そのようにして私たちが、アジアの人々の協力のお陰で変わっていく術の第一歩であるといってよいでしょう。すなわち、私たちは「引きこもり」の隘路から、アジアの人々によって助けて貰えるように、自らを開く勇気を持たなければならないのです。もちろん、私たちが変わって行くことは、同時に他者を変えてゆくことでもあります。」(酒井直樹「帝国の喪失と引きこもりの国民主義」『現代思想』2013・12, 同「パックスアメリカーナの終焉と引きこもりの国民主義」『思想』2015・7)
4. 私たちにとっての他者としてのアジアという問題にもっともラジカルにむきあってきたのは、あらためて言うまでもなく、竹内好であるが、その竹内がどのように論じられてきたかの系譜をたどることを通じて、戦後日本において「アジア」という問題がいかに関与されてきたかを検討している佐藤美奈子「「アジア」を語るということー1980年代以降の竹内好論ー」は、示唆に富んでいる。
5. 先に〈註〉の3でふれた酒井直樹は「恥」の問題について、別のところで次のようにも言っている。——「歴史的な責任から逃避しようとする者は、(中略)共感の共同体の空想によってしばしば恥の感情を忌避しようとする。(中略)恥を避けるために共同体の空想を求めるの

ではなく、恥のなかに国民、民族や人種を横断する社会性の可能性を認めるべきなのだ。戦争犯罪のような事項について、犯罪者と私が同胞であることは、私の態度を決定する理由にはならない。もし「日本人」という国民が・・・共感によって（つまり、共犯によって）統合された集団であるのなら、私はそのような日本人である必要はない。（中略）つまり、日本人を割る事だ。私は恥の感覚のなかにおり、私は戦争責任を問う人々の眼差しのなかにいるわけだが、そのような人々の問いかけに答えることは、自らが有罪可能性の立場におかれていることを否認することなく、しかし、責任を問う人々が押しつけてくる日本人という規定に抗議し、日本人の内実を大きく変えて行くことだろう。（中略）日本人の内実を変えて行くためには、日本人を統合するどころか、日本人の即自的な共同性に分裂をもちこむことが必要なはずだ。（後略）」（酒井直樹「日本／映像／米国」青土社2007）

6. 「外部でも内部でもない「外部性」を内部に深く穿つ「超克」の実践」（磯前順一・酒井直樹「戦後日本 社会と国民国家としての植民地体制」

「思想」2015・7－「思想の言葉」）——「戦後70年首相談話」に抗する「私・たちの告知」がめざしているのは、そのような意味での「実践」である。言いかえれば、「私・たちの告知」は、「戦後70年首相談話」に抗することを、この列島社会の構成原理をどのようにして、どのようなものとして創出するかという問題として立たせること、この列島社会の構成原理を、アジアと向き合い、いかにしてこの日本を底から内破することで創出するかという問題として喚起することを意図している。むろん、私・たちはその内実が貧しいあばら骨を露出するものでしかないことを、よく自覚している。——その意味で、安倍政治を葬ることで戦後日本国家の構成原理をまさに「超克」し、その〈むこう〉へ行くべきことを説く武藤一羊「何をもちて安倍政権を倒すか、その先に何を展望するのか－戦後レジームの別の越え方」（「PEOPLE'S PLAN」69）は、大きな刺激と大いなる励ましを与えてくれる。

私・たち、〈25時行動委員会〉は、このあと秋を中心に「トークセッション：憲法とは逆に憲法から」を予定しているが、その企画を通して、私・たちは「戦後日本の生み出してきた空想を乗り越えて、冷戦の産物の域を出なかった被害者としての戦争放棄の思想を、世界各地の人々に訴えることのできる普遍的な思想に鍛え直す」（磯前・酒井同上）手がかりを再考したいと、思う。そうすることで、「戦後」の超克」という問題設定は日本だけではなく、同様に過剰な民族主義に訓育されてきた韓国、傲慢な植民地支配者の態度が習い性になってしまった米国、新たな帝国の宗主国意識に憑依された中国などへ「複数の戦後（＝ポスト戦争）」状況の批判的検討を促すもの」（同上）であることを明らかにし、米中複合覇権からのアジアの解放、「共にあるアジア」へむかう路の道標の一つなりとも手にしたい、と思っている。

やや力んで言うならば、そのようにして、「戦後70年首相談話」への抵抗という「ゲリラ戦」は、安倍政治打倒の〈前線〉の一翼をになうものへと転生するだろうし、転生しなければ

ならない——これが、2015年、敗戦／戦後70年の夏、私・たちの立っている場所である。

第2の〈後註〉——2015年8月1日

この貧しさを 生きて行かなむ

——「7・29戦後70年市民宣言－安倍首相の歴史認識を問う－全国報告会」
に「参加」して——

私・たちは、この夏、胸に抱きしめた言葉がある。——未成の〈列島共和社会住民〉になり
変わりあう路を！

遠い昔、この列島に流れていた四方の複数のアジアの記憶。私・たちは、中国や朝鮮半島から、
どれだけのものをもらってきただろう。四方を海に囲まれたこの列島に生きてきた私・た
ちにとって、アジアというものはかけがえのない最大の〈他者〉なのだということを、あらた
めていま、思い返してみたいと思う。

私・たちの〈他者〉としての東アジアへ向かって、私・たちの日本列島をひらいていきたい。
アジアから問われている。アジアからの視線を感じる。私・たち日本人とは、何者なのか——
このどうしようもない恥ずかしさみたいなものを、どうしたらいいのか。

日本人であることを引き受けつつ、日本人であることを否定すること。そこから、日本人で
あることの内実を大きく変えていくこと。私・たちのかけがえのない〈他者〉としての、アジ
アの人々とアジア出自の列島住民に対して、みずからをひらくこと。恥にむかって自分をさら
すということ。解放されなければいけないのは私・たちの側であって、アジアの人々の力を借
りて、恥をかき、恥をかくことによって自分・たちが〈他者〉をもう一度再発見する。そのと
きに、自分と〈他者〉との関係が変わる。

そのようにして、未生の〈列島共和社会住民〉になり変わりあう道を遠くまで行きたい。——
——ここから、2015年私・たちの夏が始まった。

この夏、列島各地から、自分たちの言葉で編んだ「民衆談話」や「市民宣言」を発表し発信
する動きがあり、私・たち〈25時行動委員会〉もこのことに関わることを試みた。——この試
みを通じて、私を感じたことを言い表してみたい。

敗戦70年の、2015年夏の現時点で、「戦後70年首相談話」に対抗する、私たちの言説を表
現する。——これは、私・たちの未来を安倍の手に触れさせない、私・たちの〈ピープル〉の
力と夢見る力をかけた素手の闘いなのだ。

「平和憲法を護ろう、護ろう」と言い続けてきたけれども、その一方で「戦後」というもの
に何ら決着をつけられないできた、日本国民としての敗戦／戦後70年のありよう。それは、一

国主義的な「憲法を護る」とか「平和を守る」という使い慣らされた枠から、一步もはみ出そうとせず、「反省」はしてみせても、指弾され糾弾をうけるところには絶対に立とうとしない、身勝手に保守的なものだったのではないか。

この夏、私・たちは、そこからこそ一步を踏み出したかった。だからこそ、私・たち〈25時行動委員会〉は、発語の主体を「民衆」や「市民」としてではなく、〈列島共和社会住民〉と立て、「反省」の言説のスタイルを、断じて首相と同じ「談話」ではなく、誇らしげな「宣言」でもなく、〈私・たちの告知〉として表現しようとした。

この7月、私・たちが発信した〈敗戦70年：私・たちの告知—この列島を宰領する国家への〉は、いってみれば、かけがえのない、自分・たちの未来へむかう原点であり遠い見果てぬ夢の架け橋ともいえるもの。

しばらくして、私・たちが「私・たちの告知」を発信したある地域の人々から、その人々の企てについて、「みなさんに、お願いします。この市民宣言の『賛同者』にぜひ加わってくださるか」という通信が、私・たちに送られてきた。・・・えっ？「賛同者」に加われ？私・たちに？

また、その後『「戦後70年：安倍首相の歴史認識を糾す全国集会」(仮称) 参加ご協力お願いします』と題してメールが送信されてきた。そこには、「当集会にゲストとしてご参加いただき、・・・連帯と励ましのご挨拶をいただければと願っています」とあった。・・・えっ？これはなんだ？「ゲスト」だって？この私・たちが？「連帯と励ましを」だって？この私・たちが？

〈私・たちの告知〉は、他の地域のものからはきっと〈異質〉だったのだろう。しかし、はっきりとそこに〈異質〉なものがあるのに、まるでみえないかのようにして〈異質〉なものとしてさえ認識されないということは、どういうことだろう。むろん、私・たちの未熟さということがあろう。けれども、そのことを含めてともに〈声〉をあげることにむかって練りあげる営みが、どうしてこうも貧しいのか。貧しい関係でしかないのか。——そのことが、私にはなによりも悔しく、残念なことだった。

この夏の初め、私・たちは、戦後70年のこの夏、この列島が「安倍首相談話」に抗う多種多様な言説によって満ちあふれたら、と思いを重ね、そうなることを願っていた。

7月29日、東京の衆議院第一議員会館・国際会議室で開催されたその「集会」は、広島、大阪、愛知、埼玉、東京、北海道からの参加者、多くのマスコミ関係者たち、「学者・文化人」とよばれる人たち、数名の国会議員も交え、東京近隣からたくさんの人が参加していた。

私は、この集会に参加している間、ずうっと、この貧しさはなんなのか、参加している私・たちの表情はなんて貧しいのだろう・・・と思いつけていた。

はたして、敗戦70年のこの夏、この列島に「安倍首相談話」に抗う多種多様な言説が生まれているのだろうか。はたして、なにをもって対抗しようとしているのか。私・たちがつくりだすべきこの列島の未来像の、どれほどの構想力をもって抗おうとしているのか。

集会前夜に突然発信されてきた、「共同声明」案。本当に列島からの「共同声明」を発信しよ

うという覚悟があるのなら、一年とはいわないがせめて半年とかの、お互いの行き交う〈時間〉こそが必要だったのではないか。集会開始直前に配られ、後に採択される予定の「共同声明」案を目の前にして、どうしようもなく悲しくなっている自分がいた。この列島に一時的にせよ巻き起こった、私・たちの言説を表現しようという営みが、胸にあふれた思いや願いが、私・たちのこの夏の日々が、このようなかたちで「共同」のものとされていく、貧しさ！立派な会場の席に座りながら、本当に泣きたい気持ちだった。

集会の終わりに、呼びかけ人の人たちによって準備された、安倍首相宛の「共同声明」案に対して、会場は採択の大きな拍手に包まれた。その拍手が止みそうになるまさにその瞬間二つの世界の境界で拳手をした自分を見ている私がいた。

「私・たちが本当に向き合わなければならないことの大きさに、私・たちの〈共同の作法〉のあり方が釣り合っていないのではないかと、思います。この「共同声明」から、〈25時行動委員会・富山〉は、はずれます。」——しんと静まりかえったその一瞬、この時私・たちは、はっきりと一つの世界と訣別したのだった。

「この貧しさを生きて行かなむ」——燃える夏の底で、そうくりかえし思い続けていた。

共同声明

2015年7月29日

内閣総理大臣 安倍晋三 様

【北海道】「市民による敗戦70年談話を創る－西山太吉さん講演の集い」実行委員会

【埼玉】民衆談話の会

【東京】日韓つながり直しキャンペーン2015

【東京】戦後70年 新しい東アジアの一步へ！市民連帯

【富山】25時行動委員会

【愛知】戦後70年市民宣言・あいち

【大阪】戦後70年東アジアの未来へ！宣言する市民

【広島】検証：被爆・敗戦70年

－日米戦争責任と安倍談話を問う－実行委員会

戦後70年にあたり、要求します！

今年、戦後70年、日韓条約50年という歴史的な節目の年です。安倍首相は、8月15日に向けて戦後70年談話を発表する予定といっています。

これまで日本政府は、1995年村山談話で「植民地支配と侵略」によってアジア諸国の人々に「多大の損害と苦痛を与え」、「痛切な反省」と「心からのお詫び」を表明したことを、歴代の内閣が踏襲してきました。しかし、今回発表さ

れる談話には、「おわび」や「植民地支配と侵略」の表現など村山談話の内容を盛り込むことに否定的とも言われ、しかも閣議決定を経ず、首相の個人的見解として発表すると言われていました。

私たちは、自国が行った歴史的事実に対して心からの謝罪と賠償を行うこと、またこの歴史認識を若い世代に継承していく責任が問われていると考えます。

現在、北海道、埼玉、東京、富山、愛知、大阪、広島など全国の8つの市民団体が「戦後70年市民宣言・民衆談話」を発表、または予定をしています。

市民宣言は、私たち市民の歴史認識とそれに基づく責任・反省・謝罪の表明はもとより、安倍首相の歴史修正主義に抗議し、正しい歴史認識に基づく行動を安倍首相に緊急要請するものです。合わせて、私たち市民の「アジアの平和への決意」の表明でもあります。

私たち全国の8団体は、本日「戦後70年市民宣言・民衆談話～安倍首相(談話)の歴史認識を問う」全国報告会を開催しました。以下の点を安倍首相に対し要求します。

記

- 1) 安倍首相は過去の日本の侵略・植民地支配の歴史を直視し、心からの反省・謝罪・賠償を求めるアジアや日本の市民の声を真摯に受け止めて、行動すること。
- 2) 安倍首相は戦後70年談話を表明する場合、「村山談話」「河野談話」を否定せず継承すること。
- 3) 日本の平和憲法はアジアとの不戦の国際公約です。安倍首相は平和憲法の精神にのっとり、真の信頼・友好を築き、平和なアジアをつくるために、行動すること。

第3の〈後註〉——2015年8月15日

「戦後70年首相談話」に接して 緊急に

「戦後70年首相談話」に接した。それは、私・たちの想定といささかも変わるものではなかった。——それは、彼がもっとも得意とする(と、彼らだけが思っている)「話法」の戦線で、蝶のように、いや蝶ならぬ迷彩色の蛾のように、舞ってみせ、120年余にわたる歴史の舞台を軽やかに跳びはねた。——近代の幕開けの脅威、その脅威の行きついた果ての惨劇にふれて、大向こうの拍手をねらい、世界、とりわけアジア諸国家の宰領者の口にあう最大公約の負の味付けをもって、この国のその後の道行きを装飾し、その過程での悪行についてあちらに跳んでは「寛容」に感謝し、こちらに跳んでは過不足なく「反省」し……—というように、安倍首相は、この列島を宰領する国家の「戦前」—「敗戦」—「戦後」—現在—未来について、歴代

の「首相談話」と彼の推進・強行している「積極的平和主義」の間を可能な限り自由に跳びはねる「ダブルスピーク」＝「安倍話法」の舞を踊ってみせた。その意味で、歴代の「首相談話」のいわゆる「キーワード」は彼にとって恰好の「ダブルシンク」の材料だった。

「戦後70年首相談話」に接した。それは、私・たちの想定といささかも変わるものではなかった。——すでに「25時行動委委員会通信・2、3」などでくりかえし触れてきたように、「戦後70年首相談話」に抗する私・たちの基本的なモチーフは、敗戦／戦後70年の過程で表されてきた全ての「反省」のスタイルをいかにして超えるか、どのようなスタイルをこそ創出するべきなのかという〈問い〉だった。なによりもポスト「冷戦」期にこの列島を宰領する国家が案出した苦肉の「首相談話」というスタイルを超えることこそが課題だという念이었다。——「戦争責任」・「戦後責任」・「戦後発生責任」の履行を積年にわたって回避しつづけてきた日本国家が、ポスト「冷戦」の段階でなお継続する「冷戦」状況をぬうようにして挙げられたアジアからの〈声〉を避けられず案出したもの、それこそが「首相談話」だった。それがその後日本国家だけではなく、アジア諸地域を宰領する諸国家にとっての一つの基準になることのうちに、ポスト「冷戦」下の「冷戦」状況のアジアのありようがあったのであり、その基準の根元には不可算のアジアの人々のうちつづく苦難の生と死が累積していた・しているのだ。その意味で、「首相談話」という「反省」のスタイルにおいて、日本国家はまさに「ポスト戦後責任」というべきものを加算してきたのである。

「戦後70年首相談話」に接した。それは、私・たちの想定といささかも変わるものではなかった。——2015年夏、私・たちは、敗戦／戦後70年にしてようやく70年にわたる日本を生きる私たち自身の負の累積を「反省」し、戦後日本国家の〈むこう〉へいたるこの列島の未来像を拓くことばの群れ群れがこの列島をおおい、そのざわめきが四方の海をこえてアジア・太平洋の諸地域にとどき、やがてその海が〈ピープル〉が行き交う〈海〉になる……という〈夢〉をゆめみたのだった。言うならば、それは世界知らずの私・たちの一場の夢想だったのだろう。来るべき「戦後70年談話」へむけて発せられたたくさんのことばの群れ、発せられた「戦後70年首相談話」に関わるたくさんの「マスコミ」言説、「識者の声」の群れは、それらが「首相談話」をめぐる収斂するものであるかぎりにおいて、「安倍話法」＝「ダブルスピーク」の舞台で背丈に応じた舞を踊ったのだ。その舞台に乗ったかぎりにおいて、それらの舞の群れは安倍の銜気あふれる舞を色どる背景でしかなかった。しかし、私・たちは、たとえどんなにあえかなものであれ自前の舞台で、たとえどんなにかそけきものであれ、自前の舞を踊ったのだ。そのかそけき舞—列島を宰領する国家への「私・たちの告知」を生きることへむけて、その舞のかそけさを野太さへ、その舞台のあえかさを鮮やかさへ転生させることへむけて、私・たちは遠くまで行くのだ。